

The Annotated “The Star-Spangled Banner”

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-04-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石木, 利明 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6987

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



“The Star-Spangled Banner” — 注解と翻訳

石 木 利 明

【キーワード】 アメリカ国歌, アメリカ国旗, 星条旗, 1812年戦争, national anthem, The Star-Spangled Banner, The War of 1812

はじめに

2020年ドナルド・トランプ大統領が再選をかけた、民主党候補ジョー・バイデン前オバマ政権副大統領との対決は、さまざまな意味でアメリカ大統領選挙の歴史上稀に見る様相を呈した戦いとなり、特に選挙戦終盤にはわが国でもこれまでになく熱の入った報道が連日なされた。数多ある印象的出来事の一つは、大きな話題を醸した両候補のテレビ討論会だった。その内容とパフォーマンスに多くの人たちと同じく筆者も惹きつけられたわけだが、同時に少々筆者の視覚的関心を惹いたのはその舞台セットだった。

9月29日オハイオ州クリーブランドのケース・ウェスタン・リザーブ大学で行われた第1回討論会および10月22日テネシー州ナッシュビルのベルmont大学での第2回討論会でも同じセットが用いられていた。二人はCOVID-19感染防止のためソーシャル・ディスタンスをとってお互い斜めに相対し演台を前に立っていた。筆者の目を引いたのは、この二人の「背景」である。それぞれの真後ろに4メートル四方はあろうかという巨大なスクリーンが設置され、青い下地に白抜き文字が投影されている。二人がクローズアップされるたびにその文字も読み取れるほどに拡大される。“We hold these truths to be self-evident, that all men are created equal...”それがなんのテキストか、分かる者にはすぐに分かる。「独立宣言」(“Declaration of Independence”)のあまりに有名な「前文」部分である。

のちに「建国の父たち」(Founding Fathers)と呼ばれることになるトマス・ジェファソン(Thomas Jefferson)、ベンジャミン・フランクリン(Benjamin Franklin)、ジョン・アダムズ(John Adams)らにより起草され1776年7月4日大陸会議で公布されたこの宣言の前文は、人間の生まれながらの「平等」と「生命・自由・幸福の追求」という「基本的人権」を謳い、それを侵そうとする政府があるならばそれを改廃できる権利すなわち「革命権」が人民にはあることを強く主張している。13の植民地連合がこれを掲げて宗主国イギリスと戦い独立を勝ち得、民主主義国家として誕生することになったのがアメリカ合衆国である。それから244年後、二人の大統領候補は、そのナショナル・アイデンティティを表象するテキストを背景にしてあの「舌戦」を繰り広げたというわけである。

この舞台を飾るもう一つの装飾は、二人のスクリーンの真ん中上方に掲げられたアメリカの国鳥白頭鷲(bald eagle)の図像であり、これは大統領選の討論会に伝統的に掲げられる紋章である。白頭鷲は翼を大きく広げ、右足には矢を、左足にはオリーブの枝を握り、嘴には“THE UNION

AND THE CONSTITUTION FOREVER.”と書かれた細長いバナーを啜っている。これはアメリカの国章（Great Seal of the United States）を元にデザインされた図像であるが、この白頭鷲の立つバッジ型の台座上面には、この国の公式行事の背景には「絶対に」欠かすことのできない「星条旗」が描かれている。（因みに国章では星は白頭鷲の頭上、縞は体の真ん中に配置されている。）

「独立宣言」がアメリカのナショナル・アイデンティティのテキスト的表象であるならば、星条旗はナショナル・アイデンティティの図像的（アイコンニック）表象である。この国旗の実にユニークなところは、沈黙のうちに飾られたその姿の中に、「国歌」の詩と音楽とを隠し持っていることであろう。なぜならば、アメリカの国歌「星の輝く旗」（“The Star-Spangled Banner”）は、他ならぬこの旗そのものについて歌った詩、いわばこの旗が主人公となったある物語を歌った詩だからである。したがって、星条旗は図像的ナショナル・アイデンティティ表象であると同時に、「国歌」をなす「詩」というテキスト的ナショナル・アイデンティティ表象と一体となっているのだ。「国歌」が歌われるときはかならず——たとえ「国旗」がそこに掲げられていなかったとしても——「国旗」がそれを聴く者の脳内に喚起され、「国旗」が掲揚されるときはかならず——たとえ「国歌」がそこで唱歌・演奏されていなくても——「国歌」がそれを見る者の脳内で再生されるという、稀有な仕掛けの「国旗／国歌」となっているのである。

この「国歌」の背景となっているのは「1812年戦争」（The War of 1812）である。アメリカは、独立を果たして約30年が過ぎた1812年再びイギリスと戦火を交えることになる。ナポレオンの大陸封鎖に対抗してイギリスはアメリカ東海岸全域を海上封鎖したが、これによりアメリカの通商は大打撃を被る。独立革命前のイギリスによる理不尽極まる「課税強化」の嵐は、今度は暴力的「通商妨害」の形をとって再びアメリカを苦境に陥れようとしていた。さまざまな要因が絡み合っているが、これがアメリカに開戦を踏み切らせたもっとも大きな要因とされている。1814年12月24日ヘント条約（Treaty of Ghent）における英米の講和で終結するこの戦争は、イギリスの強大な圧力を再び押しつけたことでアメリカ国内の自信と愛国意識を高め、「第二の独立革命」とさえ称されることもある。

“The Star-Spangled Banner”の歌詞の元となったのは、法律家フランシス・スコット・キー（Francis Scott Key）がこの戦争中に書いた詩である。1814年9月13日メリーランド州ボルティモアの港を臨むマックヘンリー要塞（Fort McHenry）へのイギリス艦隊による砲撃は25時間も続いたが、この間スコット・キーは捕虜の交換交渉のためイギリス海軍の船に乗船しており、要塞への激しい砲撃を敵の船から苦渋の思いで見守った。この一夜が明け、曙光の中彼の目に入ってきたのは、この砲撃に耐えて砦に勇壮に翻る星条旗の姿だった。（図1・2）これに大きな感銘を受けたスコット・キーは、イギリス軍から解放されるとすぐに「マックヘンリー要塞の防衛」（“The Defence of Fort McHenry”）と題する詩を書く^{（注1）}。この詩がのちに“The Star-Spangled Banner”と改題されたのがアメリカ国歌の歌詞の起源である。ここには、「第二の独立革命」で民主主義を守り抜いたアメリカの自負と愛国心の象徴として星条旗が詠われている。

筆者は大妻女子大学文学部英語英文学科2年生の必修科目「米文学入門」を受けもっている。この科目ではアメリカ文学の重要作品をアメリカの歴史とともに紹介しているのだが、独立革命期に書かれたアメリカを知る上で外せない重要テキストとして“Declaration of Independence”（の「前文」）^{（注2）}とこの“The Star-Spangled Banner”の詩を毎年学生たちと一緒に原文で読んでいる。前者には、大変読みやすい五十嵐武士による名訳^{（注3）}があり、学生の理解を深める資料として役立っている。ところが、後者に関しては、いわゆる「定訳」と位置付けて良いような翻訳を残念ながら筆者は知らない。もちろんいくつか試みられたものはあるのだが、「これこそ定訳」と呼んで

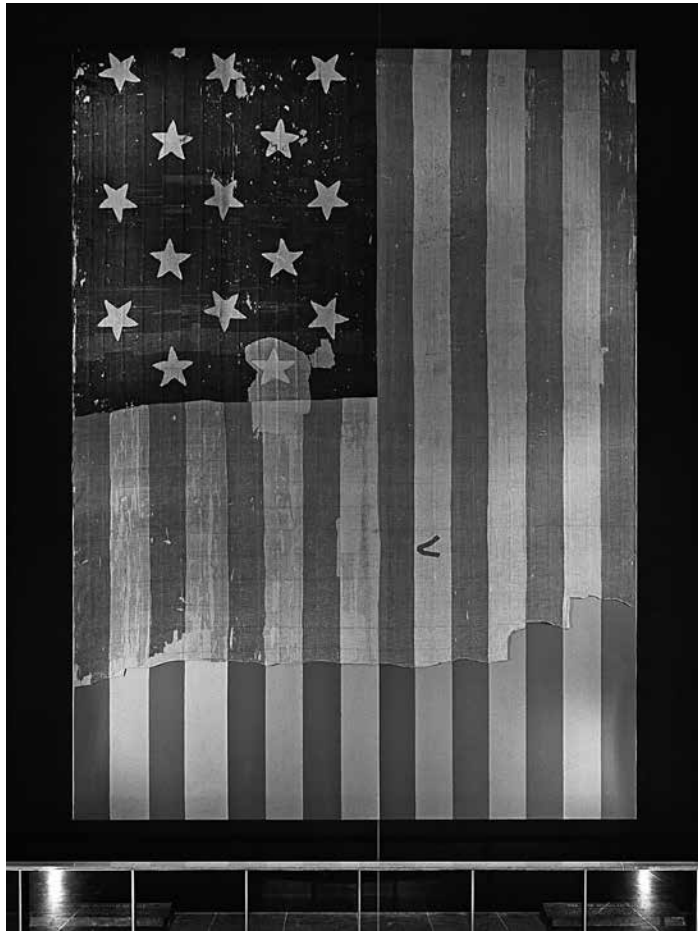


図1 Fort McHenry に翻っていた星条旗。実物がスミソニアン博物館に保存・展示されている。当時は星の数・縞の数ともに15だった。

https://siarchives.si.edu/collections/siris_sic_7506

いいかとなると、筆者には正直多かれ少なかれ不満が残るものばかりである。その大きな理由は、この詩の原文が、語学的にも背景知識的にも誤読されていることにあり、筆者には思われるからである。

本国でも第1スタンザしか歌われることがなく、したがって4つのスタンザ全てを歌える人はアメリカ人にも多くないとされる歌詞ではある。しかし、仮にも「同盟国」と称される日本において、「同盟国の国歌」の意味を理解する資料が翻訳を含めて欠けているというのは全く問題でないとは言えないだろう。そこで、この詩の意味を正しく把握するためになるべく詳しい注をつけて解説し、それに基づいて翻訳を試みようというのが本稿の目的である。「これぞ定訳」を作るといった大それた思い上がりなどないということは断っておきたいが、少なくともこれまで作られたものに散見される原文の誤読をできるだけ減らすことはできたのではないかと思う。詩の翻訳は難しい。レトリックや韻律の音楽性をできるだけ写しとって日本語だけで鑑賞できる翻訳にすることなどとても筆者のような者の持てる技芸ではない。したがって、この試訳は、あくまでも「意味を移

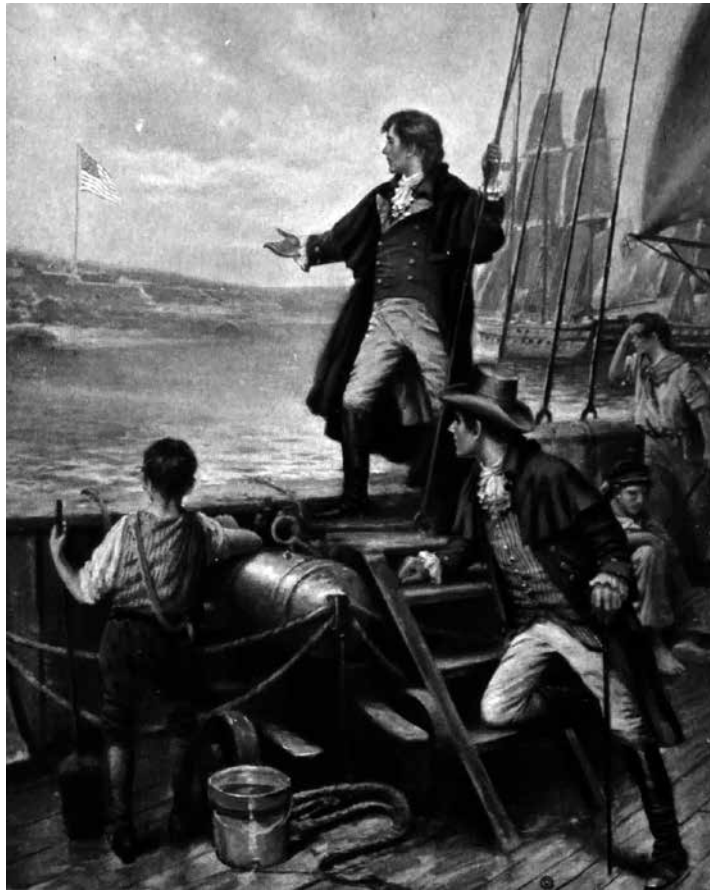


図2 暁光を浴びて砦に翻る旗を仰ぎ見る Francis Scott Key を描いた絵
https://en.wikipedia.org/wiki/File:By_Dawn%27_s_Early_Light_1912.png

しとる」ことを主眼とした翻訳であることをあらかじめ申し述べておきたい。

注釈の構成としては、まず一つのスタンザをまとめて引用し、ほぼ全行について語学的注釈と歴史的・背景知識的事柄の解説を付した。必要に応じて理解に資するような図もつけた。最後にこれら注釈に基づいた試訳を対訳形式で加えたので、原文と並べて読んでいただけると幸いである。

注解 “The Star-Spangled Banner”

I

O! say can you see by the dawn's early light,
What so proudly we hailed at the twilight's last gleaming,
Whose broad stripes and bright stars through the perilous fight,
O'er the ramparts we watched, were so gallantly streaming?
And the rockets' red glare, the bombs bursting in air,

Gave proof through the night that our flag was still there;
O! say does that star-spangled banner yet wave,
O'er the land of the free and the home of the brave?

“O”

“Oh”に同じ。さまざまな感情を表出する感嘆詞 (“expressing, according to intonation, various emotions, as appeal, entreaty, surprise, pain, lament, etc.” *The Oxford English Dictionary*, 以下 *OED*)。呼びかけの意の呼格 (vocative case) という解釈があるが^(注4)、呼格は呼びかけの対象が後に続く (“O Lord” 「主よ」, “O Canada” 「カナダよ」のように) のが普通 (OED では, interjection の “1. Standing before a n. in the vocative relation” 「呼びかけの陳述で名詞の前に置かれる」と説明されている用法) なので、ここでは感嘆の意を表すものと解釈すべき。

“say”

米語口語で, “I say” の短縮形。OED には次の説明がある。

“colloq. quasi-int. Used to call attention to what is about to be said. (In N. Amer. Shortened to say.) Also, as a mere exclamation expressive of surprise, delight, dismay, or indignant protest.” 「口語。準間投詞。これから述べようとしていることへの注意喚起のために用いられる。(北米用法で say の短縮形) また、驚き・喜び・狼狽・憤慨による抗議を表現する感嘆詞としても」。

“can you see...?”

Scott Key がそばにいる者たちに見ることを促すことばであると同時に、この詩を読む読者に星条旗のイメージ喚起のスイッチを入れることが意図されているはずだ。(図2) 参照。

“What so proudly we hailed at the twilight's last gleaming”

「われわれが(昨夜の)沈みゆく日の光の中で誇りをもって呼びかけたもの」 “can you see” の目的語。もちろん星条旗を指す。“hail” = “To call to or shout to (a ship, a person, etc.) from a distance, in order to attract attention” (*OED*)。

“Whose broad stripes and bright stars”

「その太い縞と輝く星々」は関係詞節の主語で、述部 “were so gallantly streaming” 「勇壮に翻っていた」に続く。

“through the perilous fight”

「危険な戦闘をくぐり抜け」も “O'er [Over] the ramparts we watched” 「われわれが見守る砦の上で」も “were so gallantly streaming” を修飾する副詞句。英国海軍からの砲撃は25時間に及んだ。

“the rockets' red glare”

「ロケット弾の赤き閃光」この “rocket” とは “Congreve rocket” のことで、Sir William Congreve (1772-1828) により1804年に発明された当時最新鋭の火器。巨大なロケット花火のようなもの。(図3) イギリス軍の火船エレバス (HMS Erebus) から重量32ポンド、長さ20フィートのコングリーブ・ロケットが Fort McHenry に打ち込まれた。^(注5) (図4)

“the bombs bursting in air”

「空中で炸裂する爆弾」この “bombs” とは “Congreve rocket” の先端に取り付けられた “cass” (焼夷弾) を指すものと思われる。

“Gave proof through the night that our flag was still there”

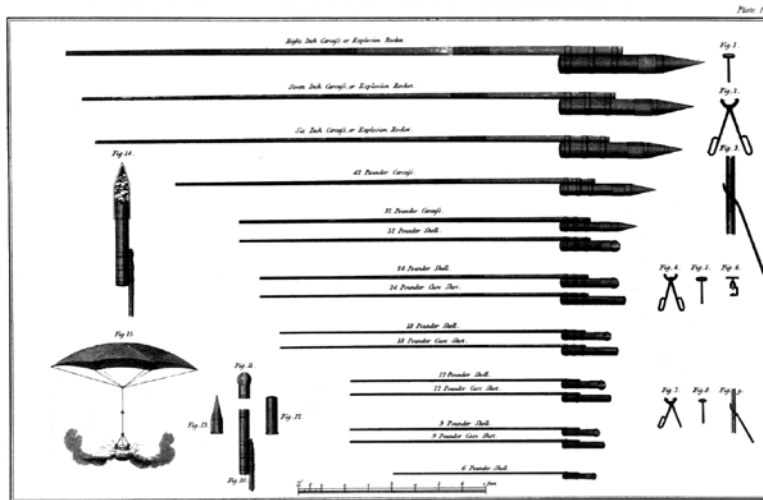


図3 William Congreve 自身の描いた Congreve Rocket

https://en.wikipedia.org/wiki/Congreve_rocket#/media/File:Congreve_rockets.gif

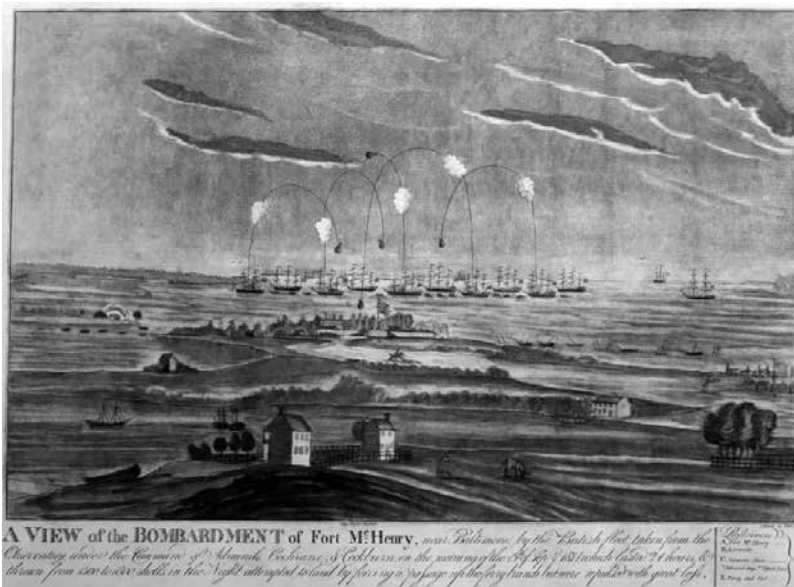


図4 マックヘンリー要塞への砲撃を描いた絵

https://en.wikipedia.org/wiki/Fort_McHenry#/media/File:Ft_Henry_bombardement_1814.jpg

主語は“the rockets’ red glare”と“the bombs bursting in air”。「ロケット弾の赤き閃光，空中で炸裂する爆弾，この激しい攻撃が夜通しかけて証明して見せたのは，旗がなおもそこに敢然と翻っている様子であった」。着弾し炸裂するロケット弾の放つ光が，敵の意図に反して闇の中でも旗の健在を示していたのである。

“does that star-spangled banner yet wave”

“The Star-Spangled Banner”

「あの星輝く旗は今も翻っているか」。現在形によって「読者の今」が問われる。

“the land of the free and the home of the brave”

「自由なるものたちの地、勇敢なるものたちの国」。1776年に起草された「独立宣言」(“Declaration of Independence”)の前文には、以下の有名な一節がある。

We hold these truths to be self-evident, that all men are created equal, that they are endowed by their Creator with certain unalienable Rights, that among these are Life, Liberty and the pursuit of Happiness. That to secure these rights, Governments are instituted among Men, deriving their just powers from the consent of the governed, That whenever any Form of Government becomes destructive of these ends, it is the Right of the People to alter or to abolish it, and to institute new Government, laying its foundation on such principles and organizing its powers in such form, as to them shall seem most likely to effect their Safety and Happiness.

“the free” (自由なる者たち)とは、「独立宣言」でこのように謳われた、基本的人権を追求できる自由を生得の権利としてもっている民であり、“the brave” (勇敢なる者たち)とは、その自由を奪おうとする権力に対して立ち上がり革命を起こす勇気をもった民である。

II

On the shore dimly seen through the mists of the deep,
Where the foe's haughty host in dread silence reposes,
What is that which the breeze, o'er the towering steep,
As it fitfully blows, half conceals, half discloses?
Now it catches the gleam of the morning's first beam,
In full glory reflected now shines in the stream:
'Tis the star-spangled banner, O! long may it wave
O'er the land of the free and the home of the brave.

“On the shore dimly seen through the mists of the deep”

「深き浦を覆う霧を通してぼんやりと見える岸辺に」。“the deep” : The deep part of the sea, or of a lake or river (opposed to shallow); deep water; a deep place (*OED*)。この副詞句全体は “What is that..., half discloses?” を修飾する。

“the foe's haughty host in dread silence reposes”

「敵の傲岸な軍隊が恐ろしい沈黙のうち砲撃を休止している」。“foe's haughty host” とはすなわちイギリス海軍。“in dread silence” は “reposes” を修飾する副詞句。

“What is that which...?”

「which…なものは何か？」

“the breeze, o'er the towering steep, as it fitfully blows, half conceals, half discloses”

「そよ風が、聳え立つ崖の上で、断続的に吹くにつれ、(その風が) なかば隠しなかば露わにする」

“In full glory reflected”

= “reflected in full glory” 「燦々と光に照らされ」。

“the stream”

「(朝日の) 光線」。

“’Tis”

= “It is”

“long may it wave”

= “may it wave long” 「末長く翻らんことを」。“may” を用いた祈願文。

III

And where is that band who so vauntingly swore
That the havoc of war and the battle’s confusion,
A home and a country, should leave us no more?
Their blood has washed out their foul footsteps’ pollution.
No refuge could save the hireling and slave
From the terror of flight, or the gloom of the grave:
And the star-spangled banner in triumph doth wave,
O’er the land of the free and the home of the brave.

“where is that band who. . .?”

「“who...” のような一団はどこにいったのか」。この第3スタンザは、第2スタンザの後イギリス軍が敗走した後を謳う。

“who so vauntingly swore”

「あれほど鼻高々に誓った」。“swore” の目的語は2~3行目の“T[th]at 節”。

“the havoc of war and the battle’s confusion / A home and country, should leave us no more”

= “the havoc of war and the battle’s confusion should no more leave us a home and country”
「戦争の荒廃と戦闘の混乱とによって、家も国もなくてやる」。“should” は「話者の意志」を表す“shall” の（時制の一致による）過去形。

“Their blood has washed out their foul footsteps’ pollution”

「奴らの足跡の汚れは奴ら自身の血が洗い流した」。

“No refuge could save the hireling and slave / F[f]rom the terror of flight, or the gloom of the grave”

「雇われ兵奴隷兵どもを、逃亡の恐怖からかくまい、あるいは墓の闇から救ってくれる逃げ場などどこにもないだろう」。

“the hireling”

「雇われ兵」イギリス軍と連合を組んだネイティブ・アメリカン軍（Shawnee 族長 Tecumseh 率いる軍など）の兵士を指すものと思われる。^(注6) 定冠詞“the”は、「総称的用法」で、「特定のものを指す形式『the + 普通名詞』を使って、実はその種族全体を代表する用法」。^(注7)

“slave”

「奴隷兵」イギリス海軍は米国の解放黒人奴隷・逃亡黒人奴隷からリクルートし1808年から



図5 The Corps of Colonial Marines の黒人兵士の想像イラストレーション

<https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/8/8f/UK-Col-Marine.jpg>

1816年にかけて“Corps of Colonial Marines”（植民地海兵隊）を組織した。この（元）黒人奴隷の傭兵を指すと考えられる。^(注8) (図5)

“doth wave”

“doth” は強意の助動詞。「確かに翻る」。

IV

O! thus be it ever, when freemen shall stand
Between their loved home and the war's desolation.
Blest with vict'ry and peace, may the Heav'n rescued land
Praise the Power that hath made and preserved us a nation!
Then conquer we must, when our cause it is just,
And this be our motto: “In God is our trust”
And the star-spangled banner in triumph shall wave
O'er the land of the free and the home of the brave!

“thus be it ever”

= “be it thus ever” 「永久にかくあれかし」。仮定法現在で願望・祈願を表す用法。(=May it be thus ever)^(注9)。

“when freemen shall stand”

“shall” は時・条件を表す副詞節で用いられる古い用法。(『ランダムハウス英和大辞典』“shall”の語義 7-(3)参照。) 現代英語では = “when freemen stand”

“when freemen shall stand / Between their loved home and the war’s desolation”

「自由の民が愛する祖国と戦争の惨禍の間に立つ時」、すなわち、「自由の民が愛する祖国を戦争の惨禍から守る盾となる時」。

“Blest with vict’ry and peace”

“vict’ry”=“victory”。“blest”=“blessed” 「勝利と平和の恵みを神から授けられ」。分詞構文。後に続く “may the Heav’n...” を修飾する。

“may the Heav’n [Heaven] rescued land / Praise the Power that made and preserved us a nation!”

「われわれを一つの国民とし守護し給うた神を、この天に救われし国が讃えんことを祈る」 “may...” は祈願文。“the Power” は「神」。“the Heav’n rescued land” は、新大陸移住を旧約聖書「出エジプト記」のイスラエル人にとってのカナン (Canaan) 移住と重ね合わせる初期ピューリタンの予型論 (タイポロジー) 的レトリック以来、連綿と続くこの地のイメージである。この地へのピューリタンの移住者は「救いに選ばれた」選民ということになる。

“Then conquer we must, when our cause it is just”

= “then we must conquer, when our cause [= it] is just” 「ならばわれわれは勝たねばならぬ、われわれの義が正しい時には」。“conquer” は自動詞「勝つ、勝利を得る」。“cause” は「主義、主張、信条、大義」。

“this be our motto”

「これ (“In God is our trust”) がわれわれのモットーとならんことを祈る」。仮定法現在の祈願表現。

“In God is our trust”

= our trust is in God 「神をこそわれわれは信ずる」。同じ意の “In God we trust” が米国の正式な標語となりコインと紙幣に刻印・印刷されるようになったが、その起源がこの詩の一節にあるとされる。

《注》

- (1) テキストは “Defence of Fort McHenry” ([https://en.wikisource.org/wiki/Defence_of_Fort_McHenry_\(broadside\)](https://en.wikisource.org/wiki/Defence_of_Fort_McHenry_(broadside))) 参照。
- (2) アメリカ議会図書館 (The Library of Congress) のウェブ・アーカイブズに納められたテキストを参照。“In Congress, July 4, 1776. The unanimous declaration of the thirteen United States of America.” (<http://memory.loc.gov/cgibin/query/r?ammem/bdsdcc:@field%28DOCID+%lit%28bdsdcc02101%29%29>)
- (3) 大下尚一・有賀貞・志邨晃佑・平野孝編『資料が語るアメリカ』(東京：有斐閣，1989年)，pp. 35-38。
- (4) “Behind the lyrics of ‘The Star-Spangled Banner’” (<https://edition.cnn.com/interactive/2018/07/us/national-anthem-annotated/>)

“The Star-Spangled Banner”

- (5) “Congreve rocket” によるマックヘンリー要塞砲撃 (the Bombardment of Fort McHenry) の詳細については, “Congreve Rocket: Britannia’s Red Glare” (<https://warfarehistorynetwork.com/2018/12/17/the-congreve-rocket-britannias-red-glare/>) 参照。
- (6) イギリス軍とネイティブ・アメリカン軍連合については, Carl Benn, “Aboriginal Peoples and Their Multiple Wars of 1812” Donald R. Hickey and Connie D. Clark ed., *The Routledge Handbook of the War of 1812* (New York: Routledge, 2016) 参照。
- (7) 江川泰一郎『英文法解説 (改訂三版)』(東京: 金子書房, 1991年), p. 122。
- (8) “Corps of Colonial Marines” については, Alan Taylor, “American Blacks in the War of 1812” Donald R. Hickey and Connie D. Clark ed., *The Routledge Handbook of the War of 1812* (New York: Routledge, 2016) 参照。
- (9) 井上義昌編『詳解英文法辞典』(東京: 開拓社, 1966年), “Subjunctive Present” の項 (pp. 1173-74) 参照。

対訳 “The Star-Spangled Banner” 「星の輝く旗」

“The Star-Spangled Banner” (The National Anthem of the United States of America)

O! say can you see by the dawn's early light,
What so proudly we hailed at the twilight's last gleaming,
Whose broad stripes and bright stars through the perilous fight,
O'er the ramparts we watched, were so gallantly streaming?
And the rockets' red glare, the bombs bursting in air,
Gave proof through the night that our flag was still there;
O! say does that star-spangled banner yet wave,
O'er the land of the free and the home of the brave?

On the shore dimly seen through the mists of the deep,
Where the foe's haughty host in dread silence reposes,
What is that which the breeze, o'er the towering steep,
As it fitfully blows, half conceals, half discloses?
Now it catches the gleam of the morning's first beam,
In full glory reflected now shines in the stream:
'Tis the star-spangled banner, O! long may it wave
O'er the land of the free and the home of the brave.

And where is that band who so vauntingly swore
That the havoc of war and the battle's confusion,
A home and a country, should leave us no more?
Their blood has washed out their foul footsteps' pollution.
No refuge could save the hireling and slave
From the terror of flight, or the gloom of the grave:
And the star-spangled banner in triumph doth wave,
O'er the land of the free and the home of the brave.

O! thus be it ever, when freemen shall stand
Between their loved home and the war's desolation.
Blest with vict'ry and peace, may the Heav'n rescued land
Praise the Power that hath made and preserved us a nation!
Then conquer we must, when our cause it is just,
And this be our motto: “In God is our trust”
And the star-spangled banner in triumph shall wave
O'er the land of the free and the home of the brave!

アメリカ国歌 「星の輝く旗」

おお、見えるか、夜明けの薄光に照らされ、
夕べ陽の沈みゆく光の中われらが誇らしく呼びかけたもの —
その太き縞と輝く星が、危うき戦いをくぐり抜け、
われらが見守る砦の上に勇壮に翻っていた姿を。
ロケット弾赤く閃めき爆風大気を震わせる一夜を耐え、
われらの旗はまだそこにあったのだ。
ああ、その星の輝く旗は、今も翻っているか、
この自由なる者の国、この勇者の住まう地の上に。

深き浦を覆う霧に霞む岸辺、
敵の傲岸なる軍勢はおぞましき静寂の中息を潜める。
しかしそこに、そびえ立つ崖の上、ざわと吹く風に見えては隠れるは何か。
今やそれは夜明けの光を浴びて燦々と輝きだす。
そうだ、あの星の輝く旗だ。ああ、この旗が永く翻ることを祈る、
この自由なる者の国、この勇者の住まう地の上に。

あの一団はどこへ行ったのか。
戦禍で故郷も国も滅ぼしてやると鼻高々に誓った連中は。
奴らは自らの血で自らの汚れた足跡を消していったのだ。
雇われ兵や奴隷兵どもに逃れゆく場所はない。おののき遁走するか、暗き墓が待つのみ。
星の輝く旗は、勝利の中、確かに翻っている、
この自由なる者の国、この勇者の住まう地の上に。

ああ、自由なる者たちが、愛する故郷を戦の荒廃から守るべく立ち上がるとき、永遠^{とわ}にかくあれかし。
天により救われたこの地が、勝利と平和の恵みを与えられ、
われらを一つの国の民にまとめあげ給うた神を讃えんことを。
われらは勝たねばならぬ、われらの義が正しいときには。
「神こそをわれらは信ずる」、これがわれらのモットーとならんことを。
そしてこの星の輝く旗を、勝利に満ちて翻らせよう、
この自由なる者の国、この勇者の住まう地の上に！

(石木利明 訳)